

福士侑生

たとえば幼い頃、学校の裏庭や公園などに友達と“秘密基地”をつくった思い出はないでしょうか。そこはただの茂みや建物の隙間、段ボールの寄せ集めで、数学者や物理学者にいわせれば「左右を高さ 15 m の建造物に挟まれた 6 m 程度の平地」でしかありません。しかし、そこには子どもたちにとって物理学的記述で表される以上の意味（たとえば「子どもにとっての隠れ場所」）が存在しています。現在の科学的記述方法では、この意味がすっぱり抜け落ちてしまいます。人が自らの身体にとっての環境世界を見出し、それに則して生活していることを科学的に記述する方法はないのでしょうか。

本著『環境のオントロジー』は、心理学・認知科学・工学・建築学・哲学それぞれの立場から環境について考察した著作集です。オントロジーとは日本語でいうと存在論をさし、「存在とは何か」を追求する学問のことです。

デカルト以降、主客二元論に立脚して発展してきた近代科学は自然の価値や存在を人間の精神の側に帰属させてきました。デカルトの「我思う、ゆえに我在り」はまさに人間が思うから世界が存在するという主観主義を生み出し、「自然は、主体（精神）と対峙する客体であり、本来的には意味も価値もない死物」（p. iii）という環境を軽視する姿勢を生み出しました。

一方、精神から切り離された身体のはうは、物理的法則に従う機械的物体として扱われるようになります。行動主義心理学の文脈においては、意識としての心は捨象され、人間の行動は物理的刺激に対する機械的反応としてとらえられるようになります。しかし、人間の行動というのは単純に「刺激—反応」のセットでは解決できず、たと

えば「座る」というただ一つの行動を実現するだけでも、座る場所に合わせて（椅子、岩、草など）無限と言っていいほどの「刺激—反応」セットを用意する必要があります。つまり、人間の身体は環境の側を無視できないのです。デカルト的二元論はすっかり行き詰まったのです。

そこでアメリカの心理学者ジェームズ・J・ギブソンは「もしも仮に、私たちが刺激ではなく、環境にある意味を直接的に知覚することができるとしたら、すなわち意味を直接知覚できたとすればどうであろう」（p.19）と考えました。そこから『人はどのようにして知るか』という問題（認識論）を『この世界はどのように成り立っているか』についての仮説（存在論）に吸収させ」（p.30）る、生態学的アプローチを導き出しました。つまり、環境の側に私たちの営みを可能にさせる（アフォーダンス）意味が存在しているという、環境の存在論を打ち立てたのです。

人間と環境がどのような存在なのかを問うことは、同時にその環境に囲まれている私たちはどう生きているのか（＝存在しているのか）をとらえ直すことです。

これは私たち教育学科の人間に重要な示唆を与えます。先ほどの“秘密基地”は、建物の隙間という環境が子どもたちの「隠れて遊ぶ」という行動をアフォードしていて、狭い所が遊びの場になることから、人間の身体は隠れる場所を自然と欲しているということが示されます。遊びは教育の一つの重要な形です。遊びという人間の行動は、さまざまなモノ（建物、木、ボール、人間など）が集まった環境と身体との相互関係の中で生じる事態であることが、この例からわかります。つまり人間の行動を環境を含めてまるごと理解することは、新しい観点から教育に重要な示唆を与えてくれるのです。

環境が人間を育み、人間が環境を見出す。本著の目的は人間と環境とをつなぐ新しい科学の道を、“環境”という存在の一般理論を新たに構築することによって導きだすことです。教育学科の皆さん、一緒に人間を環境ごと見つめてみませんか。